

目次

はじめに
 総評・審査員名簿
 受賞作品

【小学生低学年の部】

最優秀賞	きぶんがよくなる助け合い	中央小学校三年	土佐 清楠	三頁
優秀賞	助け合う世界	中央小学校三年	北村 彩笑	三頁
優秀賞	みんなの気もち	中央小学校三年	佐藤 梓	四頁
優秀賞	しあわせなしゃかいを！	高栄小学校一年	鈴木 えり	四頁
佳作	みんながもってるやさしいこころ	中央小学校三年	稲毛 翔琉	五頁
佳作	あいさつのだいじさ	中央小学校三年	佐々木 遥琉	五頁
佳作	たすけあいの心	中央小学校三年	高杉 幸那	六頁

【小学生高学年の部】

最優秀賞	障害者に対する意識	北光小学校六年	板谷 興侑	七頁
優秀賞	障がい者と私たち	北光小学校六年	黒川 禮多	八頁
優秀賞	外国人を受け入れる社会を	高栄小学校五年	鈴木 信一	九頁
佳作	今まで思ってたこと	北光小学校六年	遠藤 優芽	十頁
佳作	障がいの苦労	北光小学校六年	黒田 茉紘	十一頁
佳作	障がい者と向き合う	北光小学校六年	佐藤 愛結	十二頁

【中学生の部】

最優秀賞	高齢者の権利を尊重するために	相内中学校一年	原 みひろ	十三頁
優秀賞	すべての人が暮らしやすくなる社会へ	相内中学校一年	長尾 悠里	十四頁
優秀賞	誰にでも優しい社会を	相内中学校一年	荒町 桜李	十五頁
佳作	高齢者が少しでも楽になるために…	相内中学校一年	佐藤 鈴紗	十六頁
佳作	すべての子どもたちに安心を	相内中学校一年	山本 陽咲	十七頁

受賞作品

【小学生低学年の部】最優秀賞



きぶんがよくなる助け合い

北見市立中央小学校三年 土佐 清楠

わたしは助け合う事はとても大切だと思います。わたしもできるだけ、みんなのためになることをしたいです。前にこんな事がありました。家族とおかい物中レジでならんでいるとおとしよりが一円玉をおかい物中しまった場面に出会いました。お金の音が聞こえたのでじっと見ていました。お年よりは、気づいていなかったもので、「おとしましたよ」と声をかけました。すると「ありがとう」といつてくれました。わたしはなんだかうれしかったです。他にもこんなけいけんをしました。前にすんでいた場所はすごくポイすてがひどかったのです。だから1〜2時間ゴミひろいをしました。ゴミひろいするのはたいへんだったけどキレイになってとてもよかったです。助け合いは相手のためではありません。自分もきぶんがよくなります。

【小学生低学年の部】優秀賞



助け合う世界

北見市立中央小学校三年 北村 彩笑

わたしは、びょういんで、にゅういんしたことがあります。はじめてだったので、お母さんと、いっしょに行きました。てんてきを、もったりしてとてもたいへんでした。トイレに行ったりする時も、ずっともつてじやまでした。わたしのへやには、ほかにも3人くらい、いました。みんな、けがかなにかしてしまったりだなぁと思いました。みんなやっぱりふべんそうでした。

今のわたしは元気になったので、もうふべんなことはほとんどありません。でも、日本のどこかには歩けなかったり、元気がなかったりと大変な人がいると思います。私は、自分でできることをして、助けてあげたいです。

よの中には、いろんな人がいるので、みんな助け合う世界になればいいと思います。

【小学生低学年の部】優秀賞



みんなの気もち

北見市立中央小学校三年 佐藤 梓

私は、一年前友だちとじどうかんに、行っていました。でも、友だちの家は道路をわたさんないと、じ童かに行けないのです。だからわたろうとしました。だれど車がいっぱいいるのでわたれませんでした。するとともだちがとびだしました。あぶないと思ったので、手をひっぱりました。私はぜったいぜつめいだと思いましたが。死にかかるところは、まもらなきゃと、きづくことができました。

だれかに助けてもらうことで、日本がきれいに、みんながえがおになることがきづいてとてもうれしかった。自分の命を大切にすること、友だちの命を大切にすること。これはとっても大事な助け合いだと思います。私は、だれかがこまっているときは助けようと、心から思っています。



【小学生低学年の部】優秀賞

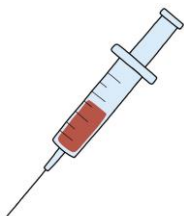


しあわせなしゃかいを！

北見市立高栄小学校一年 鈴木 えり

わたしは、このまえ、ユニセフぼきんをしました。まずしいひとをたすけたいからです。100 えんあるとポリオワクチンをかうことができます。わたしはちいさいとき、ちゅうしゃをしました。まずしい人には、ワクチンがなくて、びょうきになるひとがいっぱいいます。なくなるひともおおいです。かわいそうです。にほんは、びょうきのときおいしゃさんがみてくれます。ほけんしようがつかえます。きたみは、わたしが

ようちえんまでは、580 えんでした。びょうきしてもなおります。くすりもあります。わたしは、しあわせです。まずしいくのひと、しあわせになってほしいです。これからもぼきんをしていきたいです。そして、びょうきもなくなってほしいです。いっしょにあそびたいです。



【小学生低学年の部】佳作



みんながもってるやさしいところ

北見市立中央小学校三年 稲毛 翔琉

ぼくは、道徳の「助け合い」という勉強をした。日本人は、助け合いをすごくしていると思っていたけど、世界の助け合いランキングでは、さいかいだった。そのデータでは、他の国に比べて助け合いも、ぼきんも、ボランティアもすくなかった。でもたすけあいが少ないなかったのは、日本人は、人にそんなにたよらないからだ。日本人は、「大丈夫？」というとだいたい大丈夫。じゃないのに大丈夫という。もつと困った時は、助けてほしいと言ってもいいのになと思う。だからいちばんいいのは、「おてつだいしましょうか。」ということなんだ。日本の人が世界で一番助けてないなんてぼくは、思わない。やさしい人は、たくさんいる。ぼくも友達に助けてもらったことが何回もある。あとは、一言だけ勇気を出して話してみるといいのかもしれない。みんなが元気に、不自由なくくらせる日本になってほしい。そして、日本人だけではなく、せかい中のみんながそうなってほしい。

【小学生低学年の部】佳作



あいさつのだいじさ

北見市立中央小学校三年 佐々木 遥琉

ぼくは、ある日、こうえんで友だちとあそんでいると、車イスの人が来た。その人は、砂ぼの、坂にひっかかった。ぼくは、はずかしーなーと思っていると、一緒に遊んでいる車イスの人に、「大丈夫」と聞いた。ぼくは、何も言えなかった。ぼくは、すごいと思った。3週間後またあの車イスの人が公園に来た。ぼくは、きんちようしたけど、ゆう気を出して声をかけてみた。すぐ心がすつきりしました。声をかけるだいいさを、わかった。だからぼくは、いろんな人にあいさつをする事にした。一番きんちようした。アメリカの人に話しかけたときだ。そのときは、えい語は「Hello」一つしかわからなかった。アメリカの人がえがおで「Hello」と言ってくれた。あいさつがどれだけだいいじかわかりました。



【小学生低学年の部】

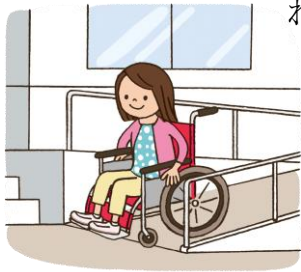
佳作

たすけあいの心

北見市立中央小学校三年 高杉 幸那

ある日友だちと帰っていると、わたしは、ハチに
どろいて、うしろに三歩下がった。すると、友だちの
家のはい水こうに右足がはいつてしまったのだ。あわ
てて友だちが、わたしのお母さんをよびにいつてくれ
た。すぐに近所の人が出てきてサポーターをいつて
くれた。その後、お母さんがきてくれてびょういんへ、
いつた。

びょういんになると、車いすをつかつた。それは、
とっても不便だつた。足をぬつたため、はしれなくな
つてしまった。だからわかつた。車いすの人とか、こ
まつている人のつらさを。だからおまつた。たすけよ
う。の、きもちでたすけよう。てね。



【小学生高学年の部】

最優秀賞



障害者に対する意識

北見市立北光小学校六年 板谷 興佑

ぼくは、先日、北見社協さんとテルベさんのお話を聞きました。

ぼくは、北見社協さんやテルベさんからお話を聞く前に、授業で視覚障害、車いす体験などをしました。

最初に、視覚障害を体験したのですが、友達がやっているのを見ると、自分でやるのでは、全くもって違いました。いつもは、なんでもないう下や階段に恐怖を感じました。目の前が暗く、周りの様子が全く分かりませんでした。でも、幸いなことに階段には、手すりがあり、今までで一番手すりに感謝しました。視覚障害者の方々は、知らない道などがどれほど怖いかと思いました。

次に、車いす体験をしました。ろう下を進むときに、介助をされていると真っ直ぐ進むのですが、自分で後輪を回していると利き腕ではない方の力が弱く、どうしても左に曲がってしまいました。真っ直ぐ進むだけでも、大変なのだ分かりました。さらに、高い段差

などは、自分の力だけでは、進めないことも分かりました。介助がないと、行動はんいがとてもせまってしまうことを知り、介助の大切さを感じました。

北見社協さんのお話を聞き、介助の大切さを改めて感じました。横断歩道をわたるとき、後ろ向きでわたることを初めて知り、体験すると信号が変わるのがはやく、後ろ向きでわたることもとても怖く感じました。また、ほそうされていない道路は、とてもガタガタで小刻みに振動が来ていました。

テルベさんのお話には、ノーマライゼーションのことなどがありました。ノーマライゼーションという言葉は、初めて聞きました。ノーマライゼーションというのは、人権そのもので、障害を受け入れることだと知りました。テルベさんは、「障害があっても、かわいそうではないし、工夫しだいでみんなと同じ生活を送れる」とおっしゃっていました。

視覚障害体験や車いす体験など、北見社協さん、テルベさんのお話を聞き、知らなかったことや言葉を知り、障害者に対する意識も変わりました。限られた授業時間の中で、とても大切なことを学んだような気がします。



【小学生高学年の部】優秀賞



障がい者と私たち

北見市立北光小学校六年 黒川 禮多

僕は障がい者に目を向けることが大切だと思います。

学校の授業で「人にやさしい町北見」の学習をする前は、障がい者のことを可哀想と思っていたけど話してくださったテルベで働く、聴覚障がいのある菅原さんは「可哀想じゃない」と教えてくださって工夫して生活していることに「なるほどお」と思いました。

そして関係なく誰かの苦手をカバーすることが大切だとわかりました。

菅原さんがテルベで働く前に、障がいがあることでことわられたというお話をしてくださって「なんで、差別するのか」と思いました。これに対して、僕は平等にすればいいと思いました。

授業の体験では視覚体験で怖かったし、屈曲困難、筋力低下体験で階段を登るのに膝が曲がらなかったです。このことから視覚体験と屈曲困難、筋力低下体験で障がいのある人はとても大変だとわかりました。

学んだことは、障がい者を差別しないで皆と同じように生活すること菅原さんのお話で学んで、差別をしないで皆と同じように生活することが大切と今でも思いました。あと障がい者は手話や講話、身ぶりや手ぶりと筆談を使っていることを菅原さんのお話で学びました。

新たに知ったことはノーマライゼーションのことです。ノーマライゼーションは人権そのものと知ってノーマライゼーションは僕たちと障がい者が平等に生活できるものだと思ったらとても大切だなあと思いました。

そして一番印象に残ったことは、最後に大石さんと菅原さんが「自分でできることは何でしょう、一緒に考えましょう。」のところが「できることは何だろう。」と深く心に残りました。

僕は、このことをこれから生かしたいと思います。そしてこれから、耳が聞こえない人、目が見えない人、車椅子に乗っている人がもし困っていたら、助けようと思います。



【小学生高学年の部】優秀賞



外国人を受けいれる社会を

北見市立高栄小学校五年 鈴木 信一

福祉とは、「人々が安心してくらせるかんきょう。」と国語辞典に書いてありました。私はこれまで、介護や障害者について考えてきました。今回は、外国人が日本で生活するためにはどうすれば安心にくらせるのかを考えました。

私はお父さんから日本語のボランティアの「いろはの会」を教えてもらいました。いろはの会は、二〇〇〇年にできたそうです。私は、日本語を教えている村田先生にインタビューしました。村田先生は、これまで一九人も外国人を教えてきました。今、外国人は日本語を話せ楽しく日本でくらししているそうです。村田先生は、相手に合わせて考えることがちよつと大変だと言っていました。しかし、楽しい事のほうが大変な事より大きいそうです。

村田先生から日本語を教えてもらっているイジャレムさんは、アフリカのニジェール出身で、北見工大の留学生です。彼は、まだ日本語が話せません。イジャ

レムさんは、「日本語ができないと困ることが多い。」と話していました。買い物や会話は一人ではできないけれど、簡単なあいさつなど、ちよつとずつできるようになり、村田先生がいてよかつたしもつと勉強し、日本人とコミュニケーションをとれるようになりたいと話しています。

私の周りにも日本語で困っている人がいます。じつは、私のお母さんです。お母さんは、「日本語ができないと自分の意味を相手に伝えられなくて、さびしい。」と言っていました。お母さんの話を聞いて私もつと日本語ができるようになってほしいと思います。

村田先生は、外国の人が国籍関係なくみんなが楽しく他の日本人と一緒に過ごせる社会になってほしいと話していました。私は、日本語を話せないと不便という問題も考えて、日本語を話せない外国人のために、日本語を教える活動をふやし外国の人と日本の人が楽しく話せるような社会になってほしいと思います。



【小学生高学年の部】

佳作



今まで思ってたこと

北見市立北光小学校六年 遠藤 優芽

私は今まで障害を持っている人達も車椅子や手話などがあれば、不自由なく過ごせているのかと思っていました。ですが車椅子の体験などを通してそうではないことが分かりました。信号を渡る時に後ろ向きから進み途中で前を向いたりした時は、後ろになにがあるのか分からないのでとても怖かったです。介助をしている時も道がガタガタしていたので真っ直ぐ進むのが難しかったり、信号を渡る時は、どのタイミングで前を向けばいいか分かりづらく少し戸惑ったりもしました。立って歩いてく人達とは違って車椅子の人達は進むスピードがこんなにも遅いのかと思いました。

視覚体験をした時も、真っ暗で何も見えず、手で手すりなどを探していました。が今何処にいるのか、周りに何があるのかなどの情報がなく目が見えない人はすごい怖い思いをしていたんだ。と思いました。

屈曲困難の体験をした時は、ご飯を食べる時や生活の中で困ることがたくさんあるのではないかと疑問

を持ちました。

手話で話している人達は、自分の気持ちを正確に伝えるのが難しかったり、手話を覚えるまでの会話の手段がとても少なく、手話を覚えても困っていたことが全てなくなるわけではないことが分かりました。

私は、この体験などを通してたくさんを知りました。その中で障害を持っている人達は、私達のように歩くことや話すことができません。生活していく中で困ることがたくさんあり、毎日それを繰り返していることをとてもすごいと思いました。そして、自分とみんなと違うことを受け入れて、乗り越えていかなければいけないことをしっかり考えていくことが私はすごいと思います。私が外に出て困っていた時に、周りにいた大人が助けてくれたことがあります。これから生活する中で、困ってる人を見つけたら、次は私が助けたいと思います。



【小学生高学年の部】

佳作



障がいの苦勞

北見市立北光小学校六年 黒田 茉紘

私は、障がい者は働けないと思っていました。でも、障がい者でも働けるテルベという会社があることを知りました。五月十六日にテルベで働いている大石さんと、菅原さんが学校に来てくれて、テルベのことや、菅原さんの生活を聞きました。

テルベは、ノーマライゼーションを実践するという取り組みを行なっています。ノーマライゼーションとは、「障がいのある人が障がいのない人と同等に生活し、ともにいきいきと活動できる社会を目指す」という理念です。テルベで働いている障がい者の方は、三十人中十九人もいます。大石さんの話を聞いて、一番頭に残っていた言葉がありました。それは、障がいがあるなしに関係なくだれかの苦手を自分のできるでカバーという言葉です。障がいあるなし関係ないというのが大切だと思いました。

次に菅原さんの生活です。菅原さんは、三歳のときに聴覚障がいという障がいになりました。菅原さんは、

旭川ろう学校で、寮生活をしていました。仕事の担当は、しいたけのつみとり、選別、出荷です。仕事をするときには、手話、口話、身ぶり手ぶり、筆談でコミュニケーションをとるそうです。手話ができない人とも口で、コミュニケーションをとっているそうです。声の高さ低さで聞こえる聞こえないがあるみたいです。銀行に行くときは、手話通訳を呼んで、通訳をしてもらいます。他の場面でも手話通訳を呼ぶことがあるそうです。障がいがあると、不便なことがあるけど、それが普通で、不幸じゃないと言っていました。これを聞いて私は、障がい者の人は、私たちが不便だと思うことが日常の中にあって、その中で幸せな生活をおくっているのがすごいと思いました。

テルベの方が来る前に、色々な障がいの体験をしました。車いす、視覚障がい、屈曲困難、筋力低下、手指機能低下などの体験をしました。どれも、介助がないと大変でした。

このような体験から、障がい者は様々な場面で、苦勞していることが分かりました。障がい者でも、楽に暮らせる社会になってほしいです。



【小学生高学年の部】

佳作



障がい者と向き合う

北見市立北光小学校六年 佐藤 愛結

私は、学校の勉強で来てくれた、聴覚障がいがある菅原さんの話を聞いて、障がい者の人に向ける目が変わりました。

私は、菅原さんの話を聞く前は障がい者は可哀想と思っていました。菅原さんは、「可哀想でも無いし、不幸でもない。」と私達に教えてくれました。

私にはその言葉が心にさりました。でもそこで疑問がありました。なぜ私達は障がいの人を可哀想と感じるのに、菅原さんにとっては、可哀想でも無いし、不幸でも無いと感じたのが私は分かりませんでした。しかし、すぐ教えてくれました。菅原さんによると「障がいの無い人との生活とは違って大変な事ばかりだけど、私にとってはこの日常が普通です。」と教えてくれました。私はさっきあった疑問がこの言葉でなくなりました。

私はまた思い出しました。障がいの人を可哀想でもないし、不幸でもない、私はまたその言葉を思い出し

ました。障がいがあっても、通訳の人がサポートしてくれる人もいます。決して可哀想ではない！と思いました。銀行や、病院だけで通訳の人も居ないといかないけど、事故や何か問題があったとしても伝えたり、災害があったとしても町内会の人や紙で伝えてくれるので、工夫することによって、障がいがあったとしても大丈夫だと思いました。

でも障がいがあるだけで、仕事をするのを断られたりしたかもしれないけど、私は障がいのある人は心の強い人だと思いました。いくら仕事を断られたり、声が聞こえなかったただけなのに怒られても、立ち上がって、テルベに行ったと思うと、障がいの人には障がいの無い私達よりも不便なこともあるのに私達よりも難しい生活でも過ごしているのが、すごいと思いました。菅原さんの周りの人が菅原さんの事を理解して、（障がい者を）手助けすればいいと思います。

そして、建物を障がいがある人でも使えるように、工夫して実現させると、障がい者だけでなく、高齢者の人でもその建物や建築物で不自由のない生活を送れると思います。

菅原さんのお話はとても勉強になりました。私は障がい者に向ける目を変えようと思いました。

【中学生の部】最優秀賞



高齢者の権利を尊重するために

北見市立相内中学校一年 原 みひろ

私は先日、道徳の授業で教科書の中に紹介されていたある新聞の投書の内容に衝撃を受けました。その内容は、満員のバスに乗っていた中学生が新しく乗ってきた高齢者に席を譲ったところ、「ふざけるな。」と説教をされたというものでした。

この投書を初めて聞いたとき、私は、この中学生がなぜ説教をされたのか、全くわかりませんでした。「せっかく親切で席を譲ってくれたのに、なぜ怒るんだろう。」

そこで私は一度、席を譲られた高齢者の立場になって考えてみることにしました。すると、私の中に新たな考えが浮かんできました。この高齢者はただ、自分で選択する機会がほしかっただけではないのか。この中学生の行動には、ほとんどの人が尊敬を覚えると思います。だけど、一部の人はそれを少し強引だと感じてしまうかもしれません。どんな人でも、自分の行動を他人に制限されたら嫌だと思いません。

ただ「高齢者だから」とひとくくりにして自分できる範囲のことも他人がしてしまったら、それはもう親切ではなく、「高齢者の自由を奪うこと」に繋がってしまっていると思います。たとえそれが優しさや親切心から出た行動だとしてもです。

私は三兄弟の末っ子ですが、兄たちは私が末っ子だからといって、たくさんのことを手伝ってくれます。それはありがたいことだけど、少しわずらわしく感じてしまう時もあります。それは高齢者介護にも共通していると思います。「心配だから」、「一人じゃできなさそうだから」という個人の価値観で高齢者の行動を全て制限してしまったら、親切のつもりでも、それは高齢者の自由を奪っていることと一緒にです。介護には高齢者の自主性を尊重し、自立した生活を送れるようにすることが必要だと思います。このことを、「自立支援介護」と言うそうです。自立支援介護の本来の目的は、社会保障費の増大を抑えることですが、私は高齢者の権利を守るという点から見ても、必要な考え方だと思います。

これからの社会は、ますます少子高齢化が進んでいくことが予想されます。だからこそ私は、日常生活や介護の場面ですべての人が高齢者の気持ちや権利を尊重していくことが大切になってくると思います。

【中学生の部】優秀賞



すべての人が暮らしやすくなる社会へ

北見市立相内中学校一年 長尾 悠里

私はすべての人たちが不自由と感じない暮らしやすい社会について考えました。

私は、総合の学習の時間に福祉について勉強をして、福祉とは「すべてのひとの普段の暮らしを幸せにする」ということを知りました。私が高齢者体験をしたとき、普段の生活とはちがって、歩きにくかったり、目が見にくく色が感じにくかったです。とても不自由でこの状態で生活するのは、大変だなと感じました。私は普段、バスに乗ることがありますが、もしも高齢の方や不自由そうな方を見つけたら、一言声をかけたり、譲ったりして、少しでも不自由な方の支えになればいいなと思います。

また、周りの人すべてが暮らしやすくなるための「ユニバーサルデザイン」があります。ユニバーサルデザインとは、「多くの人が使いやすいように考えられたデザイン」のことで、このようなデザインは身近にはたくさんあります。

例えば、階段についている手すりです。私が総合の学習で高齢者体験をしたとき、足が上がりにくく、階段の上り下りも大変で不安でとても怖かったです。手すりがあると安全に上り下りができるのでとても便利だと思いました。また子供でも手すりにつかめるように低いところと高いところの二段に手すりをつけている階段もあります。その他にも、よくお店などで見かけるトイレのマークもユニバーサルデザインです。このマークがあると、瞬時にどこにトイレがあるのかわかります。私もお店に行くときにトイレに行きたいなと思ったならこのマークを探して、人に聞かなくてもトイレに行くことができるのでとても助かっています。その他にも、ペットボトルやテレビ、文房具にも様々な工夫が施されたユニバーサルデザインはたくさんあります。

総合の学習を通して私は、小さい子供や不自由な高齢者の方々、障害のある人を支えたり、ユニバーサルデザインを利用したりして、すべての人が幸せで暮らしやすいような社会になればいいなと思いました。



【中学生の部】佳作



誰にでも優しい社会を

北見市立相内中学校一年 荒町 桜李

僕は、障害者ではありません。足も、手も、目や耳も、すべて正常に働きます。なので、障害者の本当の気持ちはわかりません。「だからこそ」、助け合わなければいけません。

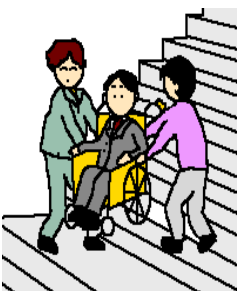
僕は、小さな町の中学校に通う、健常者です。少し前に、学校で高齢者疑似体験の福祉学習を行ないました。高齢者疑似体験では、視野が狭くなり、色が判別しづらくなるゴーグルを装着し、重りが入ったサポーターを手足につけて、普段していることを試してみました。いつもなら簡単にできることが全くできないのは、悔しく、辛かったです。

僕が、小学生の時の話です。おつかいで、街の方へバスで行き、歩いている時でした。たくさんの荷物を持ってスーパードから出てくるおばあさんがいました。おばあさんが歩道に出ようとした時、横から猛スピードを出した自転車が走って来ていました。幸い、ぶつかりはしませんでした。おばあさんは急に横から来

た自転車の驚いて、しりもちをついてしまいました。ぶつかっていないとはいえず、歩道を猛スピードで走り、おばあさんに怪我を負わせていたかもしれない。そう思うと、ふつふつと怒りが込み上げてきました。でも、世の中にはそんな悪い人とは正反対の善い人もいます。

ある日、塾に向かうバスに乗っている時、バス停に車椅子の人が見えました。バスが停まり、ドアが開くと、運転手の人が急いでスロープをおろしたり、その人を乗せたり、とても大変そうでした。その時、ドアの近くに座っていた大学生四、五人のグループが、運転手を手伝い始めたのです。声をかけながら車椅子を支え、しっかりと対応していました。助けてもらった車椅子の人は、とても笑顔で嬉しそうでした。

僕は、この3つの経験から、「世の中にはいろいろな人がいる」ということと、「みんなが助け合えば、誰にでも優しい社会を作ることができる」ということを学びました。それでも、障害者の本当の気持ちは分かりません。でも、助け合っていけば、誰とでも、分け隔てなく接することができるようになっていきます。誰にでも優しい社会を。



【中学生の部】

佳作



高齢者が少しでも楽になるために：

北見市立相内中学校一年 佐藤 鈴紗

私は、「福祉」に興味を持ちました。理由は、学校の総合の時間で「福祉」についての学習をしたからです。最初は、「福祉」という言葉の意味をよく分かっていませんでした。総合の時間では、福祉について調べたり、高齢者の体験をしました。

福祉とは、高齢者や体の不自由な人のお世話やお手伝いをすることです。

次に、高齢者の気持ちを理解するために、高齢者体験をしてみました。体には、おもりやベルト、ひざサポーターをたくさんつけました。最後に、目が見えにくくなるゴーグルと耳が聞こえにくくなるヘッドホンを装着して階段や廊下を歩いてみました。最初に、家庭科室で用意された本や図を見ました。図は、いろいろな色が使われていて、緑が青に見えたり、赤がオレンジや黄色に見えたりしてとても見えにくかったです。本には、小さい文字や大きい文字の本がありま

した。大きい文字は、まあまあ見えたけど、小さい文字は目をほそめても見えにくかったです。

次に、階段をのぼってみました。のぼるのに、足が重くていつも普通にのぼっている階段がとても疲れるし、足が思うように上がらなかったです。

最後は、自分達の教室に行き、ペンで紙に文字や絵を書きました。ペンの色もわからないし、自分がちゃんと文字を正確に書いているのがよくわからなくて大変でした。そして教室から出て階段を降りました。階段は、のぼるより降りるほうが所々つまづきそうになってとても怖かったです。

今回の福祉体験では、高齢者の人達は階段の上り下りや本の文字が見えにくい、色や文字が正確にわからないなどの、不便がありました。今回の福祉体験では、友達がサポートしてくれました。けどもしサポートしてくれる人が一人もいなかった場合、私はとても不安で「サポートしてほしいな」と思います。それと同じで、きっと高齢者の人達も同じ気持ちだと、私は、思います。だから私は、もし高齢者が辛そうにしている状況だったら少しでも高齢者が楽になれるように、恥ずかしいけれど、高齢者の気持ちを尊重して、サポートしたりお手伝いしたいと思います。

【中学生の部】

佳作



すべての子どもたちに安心を

北見市立相内中学校一年 山本 陽咲

私は先日、中学校の学習で福祉のことについて学びました。その授業では福祉と防災のつながりや、高齢の方の福祉を学び、実際に高齢者体験をしました。あちこちが痛くて不自由なところばかりでしたのでしんどかったです。完全ではありませんが、高齢の方の気持ちが変わった気がしました。そこで私はふと、「福祉といっても、他にはどんな種類があるのかな?」と思いました。調べてみて、私は特に「子どもの福祉、乳児院」に興味を持ちました。なぜ興味を持ったかという、弟の世話をする中で小さい子の対応に興味をわき、好きになったからです。

まず乳児院とは、一九四七年に設置された当初は戦災孤児や、栄養、衛生上の問題による発達不良、感染症などから子どもたちを保護するものでした。その後、七十余年にわたって、家族や赤ちゃん、幼児を支えてきました。乳児院には色々な子どもたちがいます。なにかの障害を持っている子や、家族との別れで心が傷

ついている子などがいます。

家族との別れは、高齢の方や大人など誰でもつらいですが、小さい子だと状況が捉えにくくビックリしてしまうのでとても苦しいと思います。ですからこういう施設があると、小さい子を笑顔にできるかもしれません。私は小さい子の笑顔は天使だと思うので、この施設や子どもの福祉で少しでも多くの子ども達の笑顔を守ってほしいと思います。次に乳児院を利用する理由です。乳児院を利用する理由で一番多かったのは子ども達に対する虐待です。最近は複雑な気持ちになるニュースをよく耳にします。子どもはよく泣くのでうるさいと思う人もいるかも知れませんが、小さい子は喋れないかわりに泣いて伝えようとしています。何を言っているかわからないかもしれないですが、なにか理由があつて泣いているのは確かなのでイライラしないで冷静でいるのがいいと思います。

このように乳児院には色々な事情をもった子ども達がいいます。

「子どもの福祉、乳児院」はそんな子ども達を支えていて、素晴らしいと思います。なので私も子どもに関わり、支えられる職業に就いて、素敵な大人になりたいです。

